



▲「現在、岐阜市近郊に10カ所の養蜂場があり、そこでミツバチの育成をしています」と話す中村正社長



▲巣礎づくりの風景



▶機械を通してできた六角形の巣房



◀明治後期に掘けられていた巣板

# 秋田屋本店



BRAND  
暖簾  
を受け継ぐ

西洋式養蜂業を  
日本に広める

## <プロフィール>

社名 株式会社秋田屋本店  
住所 岐阜県岐阜市加納富士町 1-1  
電話 058-272-1221  
代表者 中村正 代表取締役社長  
(九代目)  
創業 文化元(1804)年  
資本金 5000万円  
売上高 66億円  
従業員 260人

## 六代目が巣箱をつくったのが契機に

岐阜地方は近代養蜂の発祥地であり、全国でもトップクラスの養蜂県でもある。ミツバチが好むレンゲの作付面積が日本一で、岐阜県産のレンゲはちみつは、国産最高級ブランドとして知られている。

その養蜂業を長年支えてきたのが秋田屋本店だ。本社はJR岐阜駅の目の前にあり、「それには訳があるのです」と中村正社長は話す。

昔の養蜂家は、2月から8月にかけて、ミツバチと共に花を求めて鹿兒島県から北海道へと貨車で移動した。そして、そのちゅうど中間点となる岐阜でレンゲはちみつを採取し、資材やミツバチの調達を行った。秋田屋本店はその資材やミツバチを販売し、ときには運転資金や機材一式を提供していたという。

「うちは、はちみつを採取するいわゆる養蜂家ではなく、養蜂問屋という位置付けなんです。私が子どものころは多くの養蜂家に自宅を宿泊場所として提供していました」  
今では移動手段がトラックに変わったが、それでも毎年多くの養蜂家が同社を訪れているそうだ。

同社の創業は文化元(1804)年。もともとは秋田杉を扱う材木

できた養蜂家に対する感謝も忘れない。何しろ、同社は養蜂家が採取したはちみつなどの生産物を納めてもらい、全国に販売しているからだ。

また、同社は使われてきた巣を買取り、蜜ろう(ミツバチから分泌される、巣を構成するろう)を溶かして固め、それをリサイクルして、巣礎をつくらせている。養蜂家あつての秋田屋本店ともいえるわけだ。

「われわれは養蜂業問屋ですが、ハチ育でのプロフェッショナルでもあります。ここが当社の自慢でもあります。おそらく全国でも類を見ない点だと思っています」

それは、同社の養蜂部が長年の経験と技術により、健康なミツバチを大切に管理し、育ててきたからだ。それらは「秋田屋系優良種」と呼ばれ、繁殖力が旺盛で、安心・安全なミツバチとして、全国の養蜂家に届けられているという。

中村社長によると、健康なミツバチを育成するために、世界各国から新しい品種を導入し交配させている。というのも、同じ品種だと近親交配が続いてしまい、だんだんミツバチが弱くなってしまったためだ。そして現在、最も力を入れているのが蜂群を増やすことだ。

一昨年から全世界でミツバチの失踪や大量死が問題になっている。

商だったが、明治20年に六代目・中村源次郎氏はその材木でミツバチの巣箱を製作したのを契機に、養蜂の世界に身を投じることとなった。

六代目は「岐阜で最初に洋服を着た」と伝えられるほど好奇心が強く、巣箱を製作すると同時に昆虫学者の名和靖氏と共にミツバチの研究を始めた。そして、日本最初の巣礎(ハチの巣の基礎となる板・63頁右上写真参照)である「いろは巣礎」を製作。六角形の巣房(同右下写真参照)をつくるための機軸をアメリカから輸入し、量産を始めた。この巣礎があると、ミツバチが巣をつくりやすく、2日ほどででき上がってしまうそうだ。

また、養蜂先進国のイタリアから西洋ミツバチを輸入した。当時、日本には日本ミツバチと呼ばれる品種がいたが、西洋ミツバチに比べてはちみつを取る力が弱かった。そこで、養蜂家により多くのはちみつを収穫してもらおうと、西洋ミツバチの輸入を考えた。

しかし、最初のうちは日本の気候に合わず苦労した。品種の違いも改良を加え、日本の気候に合うミツバチに品種改良したのである。これらの努力が実り、はちみつの生産量は飛躍的に拡大、養蜂家から感謝の言葉が多く寄せられた。

詳しい原因は不明だが、地球環境の変化が大きな影響を与えているのではないかとされている。いずれにしても、ミツバチの減少により、イチゴやメロンなどの果物や野菜の生産に影響が出ると危惧されている。そのせいで、ミツバチの盗難事件もあつたほどだ。

中村社長は、そうした問題をミツバチの群れを増やすことによって解決し、さらには日本の食料自給率向上にも貢献したいと考えている。

「ミツバチの重要な役割の一つがポリネーション(花粉交配)なんです。それによって、果物や野菜の奇形が減り、収穫量も増えるんです。おそらく今後、中国をはじめとした新興国がさらに発展していくと、世界的に食料不足が大きな問題になってくると思います。従って、日本の食料生産量を上げるためには、ミツバチは欠かせないわけです。これからは養蜂の振興に、より力を入れていこうと考えています」と中村社長は強調する。

現在、ミツバチを利用して花粉交配を行っている農作物は優に100種類を超えている。それだけに、養蜂業の社会的使命は一層高まっており、今後、秋田屋本店の果たすべき役割はさらに重要になってくるに違いない。

(文・山田清志)